

まほろば 自然農園だより

2015 - 11 月号



宮下 洋子
Hiroko Miyashita

小さな助っ人登場！人参畑で奮闘中。

漬物野菜出荷中

今の時期は、漬物野菜や青菜類を収穫しながら、同時に畑の片付けもどんどんやっていかなければいけないので、1年で一番忙しい時期ではないでしょうか？

それなのに、日照時間はどんどん短くなって、寒さが身に浸みます。

これからは、根雪になるまでに、寒さに追い立てられるように、仕事をしていくのでしょう。

Sサイズはお早めに！！

去年は、キャベツや白菜の種まきや、定植が遅れたので、なかなか大きくなって、巻き切らずに雪の下に多く残ってしまいましたが、今年は、早くから出荷出来ています。

大根も、どんどん大きくなって、遅くなると、漬物大根はSサイズがなくなるそうです。

小さいのがお入用の方は、お早めにご注文下さい。

農園チーフの福田君によると、年々、漬物大根の注文のサイズが小型化しているそうです。

野菜も、昨今の家族構成を繁栄しているのですね！

昨日、畑に行ってみるとずい分と大根が少なくなっていました。この分では漬物大根はもちろんの事、店売り大根も今年一杯ないかも知れません。良く売れているようです。



だんだんサイズがなくなってきました。お早めに。

今は自然農法ばやり

突然話題は変わりますが、無農薬・無化学肥料・無施肥（無肥料）・無除草・不耕起を掲げる自然農法がとても流行っているようです。自然農法でも、無除草・不耕起までしているのは、余り機械化されていない小農家や自家菜園ですが、完璧に無除草ではありません。作物より草丈が伸びないように刈ったり、根元から刈ったり、人によって違うようです。また、刈った草などで作物の根元を覆ってあげる（草マルチ）のこともあります。

いずれにしても、無農薬・無化学肥料・無施肥（無肥料）の原則は、大体共通のようです。大体と言うのは、無施肥（無肥料）ではないけれど、自然農法と言っている場合もあるからです。また、肥料は使っているけれど、植物性だけで動物性肥料は使わないとか、環境問題も考えれば、動物性肥料を使うことも容認しているとか・・・自然農法ほど千差万別のものはありません。

それぞれ色んな考え方がありますが、地球環境や人々の健康や幸福、平和などを目指すという共通の目的に沿っている限り、大同小異、すべて尊重すべき新しい潮流の構成要素であり仲間です。でも、ちょっと困った問題が・・・



秋の日差しに照らされて収穫真っ只中。

まほろばの農法はどんな農法ですか？

「最近では、自然農法の野菜を指定されるお客様が増えて来た」という事が、前回の社員会議で話題になりました。それは良いのですが、「まほろばの農法はどんな農法ですか？」とお客様に聞かれて、答えに窮することが多いようなのです。折に触れ、農園だよりで書いているのですが、いざ、質問されると難しいのかも知れません。

それで、従業員教育と、お客様への説明を兼ねて、私が、《まほろば農法はこんな農法です》という説明パンフレットを書くことになりました。

一番近いのは有機農法

一言で言えば、0-1テスト農法ですが、0-1テスト（人体感応メソッド）が分からない方には、余計分からなくなってしまいます。

一番近いのは有機農法ですが、それを目標としてがんばって来たわけではなく、0-1テスト農法を徹底して追及してきたら、気が付いてみ



漬物シーズンも終盤に・・・。

たら、有機農法が一番近かったのです。

いくら厳選した肥料とは言え、理想的には、他所から仕入れるのではなく、自社で家畜を飼って、狭い地域の中で、動物も植物も、生態系の循環を完結させる事が、最も理想的なのだと思います。今は、0-1テストで厳選した、有機JAS対応のほかし肥料（ブラドミン）を使っていますが、それは、自給出来ないからで、いつか広い郊外でそれをやりたいというのが、主人と私の夢なのです。



幸福とは調和

まほろばは、出来るだけ狭い範囲で、生産、加工、流通、消費を完結させるという『小国寡民』を社是として来ました。しかし、それを実践する事はなかなか難しいことです。

インド建国の父と言われ、非暴力・不服従を提唱したマハトマ・ガンジーは、幸福について、「幸福とは、あなたが考える事、いう事、する事が調和している状態である」という金言を残しています。これは本当に深く胸に響きます。

私たちは、出来ないことについて理由をつけてしまいがちです。残された人生、出来るだけ《ガンジー》で生きたいものです。



ハウスの中にはまだアイコが健在！

自然に行われていました。それも、今の有機農法のようにわざわざ堆肥づくりをするのではなく、家畜の寝床にワラを敷き、それが蓄糞と共に発酵して田畑に鋤込まれました。人糞は肥溜めと言われる陶器の甕を畑に埋め込んで、生人糞が枯れるまで（完全発酵して臭いがなくなるまで）何年かフタをしないで野ざらしにし、それから野菜にかけました。それで良く子供が肥溜めに落ちるとい事もありましたが・・・昔は、有機農法や自然農法という言葉さえありませんでした。農業は、農法ではなく生活そのものだったからです。

有機農法は古 来からの農法

ありのままに素直に考えてみれば、有機農法は、私たちの先祖が、牧畜や農業を始めて以来、長い間やって来たことでした。

今のように農業は機械化されていませんでしたから、牛や馬が田畑を耕していたのです。

当然、蓄糞や人糞までも田畑に返し、尽きることのない生態系の循環が



寒い中イキイキとしたチンゲン菜



昔はどこにも肥溜めが・・・。

堆肥づくりの ルーツは？

有機農法では堆肥作りをします。では何故、有機農法では堆肥作りをしなければいけなくなったかと言えば、家畜を放牧して糞尿を分散し、自然な形で土と同化しなくなったからです。ブタや鶏は特に一年中畜舎にいる事が多いのです。それらの畜舎から出された糞尿は山のように積み、硝酸態チツソや富栄養化の原因になり、環境汚染の原因になっています。



掘りたての人参

懐かしい農家の風景

昔は鶏は、家の軒先で飼われ、近辺を自由に歩き回って、エサをつついて何処にでも玉子を産んで、それを拾うのは子供の役目でした。虫でもミミズでも青菜でも何でも自分で食べてくるので、



小さなボランティアさん、大活躍！

飼い主は、水と、潮干狩りに行って取ってきた貝の貝殻をすり潰してあげるだけでした。

そして、鶏が歩き回って排泄した鶏糞は、また、畑の肥料として作物の残渣や家庭の生ゴミと共に^{うな}畝い込まれて、次の作物の肥料になりました。

昔は農薬など使わなかったので、虫や昆虫や小動物の糞や死骸も一杯あって動物性の肥料になりました。また、一年に一回、川掃除をして出る川底の堆積物（私の田舎、岡山では『だべ』と言いました）も栄養豊富で、その川底のどろどろ土を畑に入れると、何でも豊作間違いなしでした。今ではきっと有害物質の塊なのでしょう。昔の『だべ』は今では『ヘドロ』になりました。・・・もう何十年も前から、実家の家の前の川は川底がコンクリートになり、ホタルも飛ばなくなりました。

興農ファームと斉藤牧場

まほろばが、牛肉や豚肉を仕入れている興農ファームでは、アンガス牛は一年中放牧しているし、豚も、雪が降るまで放牧しています。そして彼らの落とした糞尿は牧草の根っこと共に土を肥やし、中標津という道東の寒い所でさえも、野菜や動物の飼料を作ることが出来ています。理想的



秋が深まって、もうすぐ雪の便りが聞こえてきそうな気配です。

な畜複合循環農法です。

まほろばで牛乳を仕入れている斉藤牧場も、一年中放牧しています。

主役は人糞

しかし何と言っても、肥料の王様、メインディッシュは人糞でした。一番パワフルであらゆる栄養素や微生物がバランスよく含まれ、作物をグングン育ててくれたからです。ですから人々は人糞の事を『金肥』といったくらいです。無料なのに『金肥』とはこれ如何に！！ですが・・・それほど人糞は価値が高かったのです。都会に住む江戸の市民も、人糞と野菜や穀物を物々交換していたそうです。農業に人糞の存在を忘れることは出来ません。現代の有機農法と古来のそれとの違いは、人糞の有無も大きいと思います。

本当に昔はすべての肥料が無料でした。そして、わざわざ作ったりもせず、《すべてのものは土より生まれて又土に還る》と言う土

着思想からすべての物を土に帰していたのです。自然に対する畏怖や一体感、共生の心があったのです。従って、肥料はく上げるのではなく、くいただいたものを還すという循環の行為でした。人糞も畜糞も本来還さなければいけない大自然（神）からの預かり物なのです。私たちは無料で無利子だから、借金を踏み倒して自然を冒しているのです。

いつからお金がなければ出来ない農業に？

では、いつ頃から高い肥料を買わなければならなくなったのでしょうか？ お金がなければ農業が出来ない世の中になったのでしょうか？

それは化学肥料の出現と機械化、分業化でした。それらによる農作業の効率化と生産性の向上によって高い収益をあげようとする農業の産業化によってでした。

機械化によって、労働力としての牛馬が要らなくなる事によって、動物性の厩肥の供給源も失ってしまいました。さらに政府は、化学肥料の輸入や生産を助ける為に化学肥料を推奨し、人糞の使用を禁止し、生ゴミも土に帰さず、焼却場で焼くようになりました。昆虫や小動物、微生物も農薬で殺し、肥料にならなくなりました。

農家は、化学肥料を購入するか、畜舎で育てられた食肉用の動物の蓄糞か、それを元に業者によって加工された有機質肥料を購入しなければ農業が出来なくなってしまいました。



ハウスのラディッシュを収穫

今や農家は、牛馬の代わりに、高価な機械類や、化学肥料、農薬の購入で借金が高^{かさ}み、離農する人も増えました。

生態系のエネルギー循環の秩序と調和した農業

昔は土地さえあれば農家は十分食べていかれたのです。戦時中は農家が一番生活力がありました。作物を生み出すのに資本が要らなかったからです。要らないものを何でも土に帰してあげれば、一粒万倍で食べるものを生み出してくれたからです。農業は生活と一体化する事によって、生態系のエネルギー循環の秩序と調和していたのです。それこそが本物の自然農法、有機農法ではないのでしょうか？ 本物の農業はお金が要らないのです。

もっと生活や自然と一体化した、農法とも言えないような営みを原点とした土着の農業をいつか実現したいと思っています。そういう意味では、今は間に合わせの農業かも知れません。しかし、ぶれる事のない原点をいつまでも失わない事が大切に思えます。

主人からのアドバイス

ここまで書いて、主人から「有機農法とか自然



再出荷が始まったラディシュ



畑にはまだたくさん白菜が。

農法とか云う概念は意外と新しい言葉だから、それらの言葉の起源を書いてみたら・・・」とアドバイスを受けました。

「なるほど、なるほど！」そうなのです。

昔は有機農法とか自然農法とかいう言葉さえなかったのですから・・・。

有機農法という言葉の起源

有機農法は、一楽照雄さんがJ・I・ロディル氏の『有機農法—蘇える自然循環と命—』と言う本を翻訳

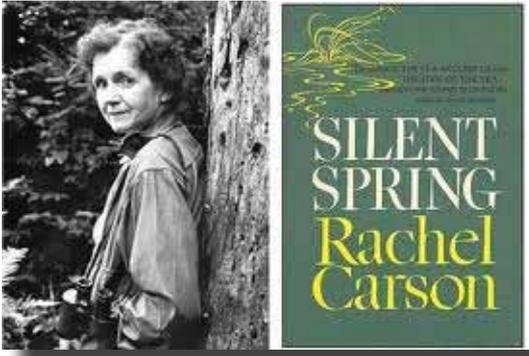
され、日本に紹介されて始めて知りました。

何しろ、アメリカのレーチェル・カーソン女史の『沈黙の春』や、有吉佐和子さんの『複合汚染』あたりから、多くの人が環境汚染や、食物汚染に目覚め、有機農法の必要性も生まれ、言葉も生まれてきたのです。

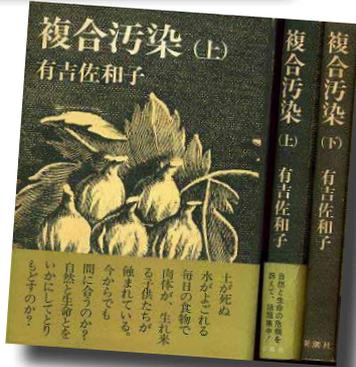
日本有機農業研究会の設立

有機農法は、20世紀初頭にイギリスのハーワード卿やアメリカのロディル氏により提唱されたものです。日本でも40年ほど前に、元農林中金常務理事だった一楽照夫さんらによって、日本有機農業研究会が設立されました。

当研究会では、有機農業の目的として、安全で質のよい食べ物を生産すること 이외に、環境を守ること、自然との共生、地域自給と循環、地力の維持培養、生物多様性の保護、さらには人権と公正な労働の保障、生産者と消費者の提携というようなことも挙げていて、自然の理に適った永続的な方法というだけでなく、社会的にも適正な方法であるということを目指しています。



レイチェル・ル
イズ・カーソン
(Rachel Louise
Carson、1907 -
1964)



有機農法は、基本的には化学合成農薬と化学肥料を用いない農法というのですが、最近では遺伝子組み換え品種を用いないというようなことも必要条件に加えられるようになりました。

有機JAS法の成立

日本では、2000年に農水省がJAS法を制定し、国際基準で有機農産物の基準が設けられ、有機農産物と表示するためには、そのような栽培方法を3年以上続けた畑で生産物であることを、認証団体から認証してもらう必要があります。

自然農法は日本独自の言葉

これに対し、自然農法という言葉は、日本独自に使われるようになった言葉で、厳密な定義があるわけではなく、様々な農法でこの言葉が使われています。基本的には有機農法の範疇を逸脱するものではないのですが、しかし、有機質肥料も限定使用あるいは不使用としたり、不耕起であったり、有機農法よりも厳



ジョン・アービング・ロデー
ル (Jerome Irving Rodale,
1898-1971)



密に人為的な栽培を排除するところがあります。自然農法の起源は1930年代に遡り、世界救世教創始者の岡田茂吉氏、そして農業試験場の研究者を辞めて愛媛県に帰農した福岡正信氏により、相次いで実践されたものでした。

福岡正信氏の自然農法

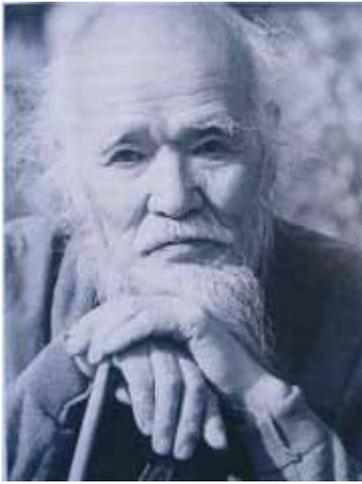
福岡正信氏は、『自然農法 わら一本の革命』、『自然に還る』、『無』と言う本を出版され、その中で、無農薬・無化学肥料・不耕起・無除草の水稲作りを提唱されたのが始まりでした。

福岡氏の自然農法は、老子の「無為自然」を根本哲学とする、究極の何もしない農業です。この



農法は、空中窒素を固定するマメ科のクローバーと、種籾にミネラル分の補給になる粘土団子を利用することにより、米麦連続不耕起直播栽培として実践されたのですが、全国には普及しませんでした。

しかし、氏の著書「自然農法 わら一本の革命」などは哲学書として世界的なベストセラーともなり、その影響を受けたものは、日本全国で様々な農法を実践することになりました。主人や私もその流れの傍流にあります。



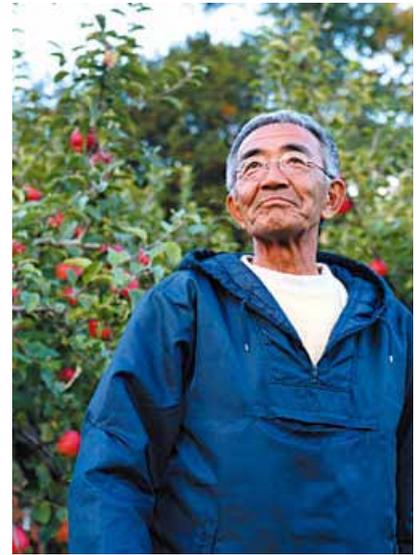
福岡 正信(1913年～2008年)
自然農法の提唱者



川口 由一(1939年) 自然農
の実践者



岡田 茂吉(1882年～1955年)
世界救世教創始者



木村秋則(1949年) 無農薬・無施肥
のリンゴの栽培に成功した

自然農法わら一本の革命
初版発行：1975年9月



福岡正信氏の潮流

福岡氏亡き後(2008年に95歳で没)、「自然農」という言葉で全国に知られているのが奈良の川口由一氏で、やはり不耕起、不除草で稲や野菜の栽培を実践しています。妙なる畑の会(奈良県桜井市)、赤目自然農塾(三重県名張市)などを通じて全国にも発信しています。大阪の藤井平司氏もその流れで、「天然農法」を提唱しました。

同じ流れに、「奇跡のりんご」で一躍有名になった青森の木村秋則さんもいて、不耕起・不除草の「自然栽培」です。

他に、大分県の赤峰勝人氏の「循環農法」、ブラジル在住の林幸美氏が提唱する「炭素循環農法」、冬期湛水・不耕起移植型稲作を指導する千葉県の岩澤信夫氏(自然耕塾)など自然農法に近いものがあります。

岡田茂吉氏の自然農法

岡田茂吉氏の自然農法は、その後MOA自然農法として全国に広がり、救世教から分派した神慈秀明会、黎明教会などでも、ほぼ同様の自然農法が実践されています。救世教では当初、人糞や厩肥など動物質を利用した堆肥は不浄なものとして避けてきましたが、その後、琉球大の比嘉照夫教授が世に出したEM菌(有効微生物群)などを利用して浄化できるとして、現在では動物質の堆肥も使うようになってきている派もあります。こうなると余り有機農法との違いはありません。しかし、救世教にはいろんな分派があり、いろんなやり方の違いがあるようで、私には今一つ把握しきれておりません。申し訳ございません。

